

報告番号	※	第	号
------	---	---	---

## 主 論 文 の 要 旨

論文題目

A Synchronic and Diachronic Study of Gerundive and Participial Constructions in English(英語における動名詞と現在分詞に関する構文の共時的、通時的的研究)

氏 名

杉浦 克哉

## 論 文 内 容 の 要 旨

本論文では、英語における動名詞と現在分詞に関する4種類の構文を共時的、通時的な観点から研究した。具体的には、遡及的な解釈を許す動名詞、現在分詞による名詞の後置修飾、時や理由などを表すwith句(with独立構文)、分詞前置の4種類の構文を生成文法の枠組のもとで分析した。前者3つについては歴史的な面からの分析も行い、また時や理由などを表すwith句については文法化の観点からの分析も行った。

1章では生成文法の概略を述べ、特に理論の変遷に焦点を当てた。具体的には生成文法が、どのようにして当初の初期理論・標準理論から1980年代の原理とパラメータのアプローチを経て、1995年以降の極小主義へ至るのかを説明した。

2章では(1) This issue is worth considering.や(2) This student needs looking after.のような評価や要求の述語の補部に現れる動名詞について議論した。これらの文では動名詞の目的語は主語に遡って解釈されるが、そのような解釈は以下に述べる仕組みにより生じると提案した。(1)において動名詞 considering は  $v^*P$  であり、空演算子が  $v^*P$  の外側指定部へAバー移動し、その痕跡を束縛する。さらに空演算子は母型主語 this issue により束縛されるので、considering の目的語は母型主語 this issue と解釈される。一方、(2)では動名詞 looking after は名詞句であるため、Aバー移動もA移動も関与しておらず、遡及的な解釈は主題役割の関連付けにより生じると主張した。さらにworthの動名詞補部の歴史的発達を、電子コーパスを用いて調査し、17世紀にそれは名詞的動名詞から動詞的動名詞へ再分析されたと主張した。

3章では、(3)boys playing tennis in the parkや(4)people living in Tokyoのような現在分詞による名詞の後置修飾構造の史的発達を、電子コーパスを用いて調査し、さらに生成文法の枠組を用いて、各時代の統語構造を明らかにした。古英語には現在分詞による名詞の後置修飾構造は存在しなかった。13世紀に(2)のような自動詞+前置詞+名詞から成る自動詞分詞関係節が現れ、さらに14世紀に(1)のような他動詞+名詞からなる他動詞分詞関係節が現れた。分詞関係節における現在分詞はそれぞれ VP、

vP であった。16 世紀にこれらは AspP へと再分析され現代英語に至っている。この再分析は be 動詞と現在分詞から成る進行形との類推により引き起こされた。

4 章では、(5)With population increasing everywhere, improvements in agriculture are an absolute necessity.のような時や理由を現す with 句を含む文(以下、with 独立構文)について議論した。Oxford English Dictionary(以下、OED)を用いた調査により with 独立構文における with は 20 世紀に文法化したと主張した。20 世紀における with 独立構文の頻度の急激な増加が with の意味の多様化を促し、様態や付帯状況を表す with の意味は漂白化された。結果として with は語彙範疇である P から機能範疇である C へ再分析された。

5 章では、(6)Joining the chorus of political figures were five former Georgia senators. (7)Examined today was our nation's chief executive.のような進行形や受動形の文において、動詞とその付加部または補部が be 動詞の左側の位置を、そして主語が be 動詞の右側の位置を占める分詞前置について扱った。分詞前置において前置される要素は進行形であれば AspP、受動形であれば vP であり、これらは A バー移動により TopP 指定部を占める。一方、主語は重名詞句転移により TP の付加位置を占める。vP だけでなく進行の AspP もまた移動が可能であるのは、それが phase であるためと主張した。この主張を裏付けるために動詞句削除と移動の観点から説明を与えた。

6 章は結論で、各章の主張点をまとめ今後の研究の課題を示した。